

超タカ派的な政策決定と
能天気な市場金融アナリスト
永山卓矢

【極めてタカ派的な今回の政策決定】

13～14日に開催されたFOMCでは、政策金利であるFF金利が0.25%引き上げられたのは既定路線だったが、FOMC委員による年内の利上げはあと1回との見通しが示され、来年についても今年と同様に3回となった。

それだけではない。年内にFRBの資産縮小措置を開始する事が確認され、状況によりそれが9月に早まる可能性も示された。

しかも国債を60億ドル、住宅ローン担保証券(MBS)を40億ドルと計100億ドルの縮小から開始し、3カ月ごとにその縮小額を拡大していき、1年後にはそれぞれ300億ドル、200億ドルの計500億ドルにまで達するとの具体的なスケジュールまで示された。

これは極めてタカ派的な内容である。資産縮小策を開始して1年後には毎月500億ドルのペースで資産を圧縮していくため、その規模は3カ月で1,500億ドルに達する。以前、FRBは2,000億ドルの圧縮で0.25%の利上げをする引き締め効果があるとの試算を示している。今回のFOMCでは、今年だけでなく来年の利上げの回数も3回との見通しが示されたが、これは資産の縮小が続いている中でも足元と同じペースで利上げを続けていく事を示唆した事になる。

いわば、来年になると実質的には四半期ごとに利上げ「2回分」に相当する0.5%程度の引き締めをしていく事になる。

FRBの資産規模は、リーマン・ショックによる巨大な金融危機以前には9,000億ドルほどだったのが、その後の3回に及ぶ強力な量的緩和策を推進した事で4兆5,000億ドル程度にまで膨らんだ。これからその規模を縮小させていくにあたり、日本経済新聞はパウエル理事が2兆5,000億～3兆ドル程度までにとどめる可能性を指摘した事から、それほど引き締め効果が強まる事はないとの論調を展開している。

しかし、これは多分に日米財務省筋の意向を受けた「情報操作」であり、見当違いも甚だしいといわざるを得ない。本誌12月号で指摘したように、米政策当局は今秋の中国での共産党大会や来年中のサウジアラビアの国営石油会社の新規株式公開(IPO)が実現するまでは、リスク選好による株高傾向を維持させようとしている事によるものだ。

この資産縮小措置は強力な引き締め効果をもたらさずにおかない。仮にパウエル理事が指摘した水準の上限である3兆ドルでとどまるとしても1兆5,000億ドルもの資産を削減する事になるが、2,000億ドルで0.25%分の引き締め効果がある事を考えると、縮小が完了するまでに利上げ7～8回分に相当する2%かそれに近い水準もの効果をもたらされる事になるからだ。

ましてや、セントルイス連銀のブロード総裁は2兆ドル程度まで縮小するように主張していたが、この見解が採用されると3%を超えるほどの引き締め効果をもたらされてしまう。

【大きな認識ギャップがさらに拡大】

しかし、市場の受け止め方は極めて「能天気」であり、FRBはFOMC委員の見通しやスケジュール通りに利上げや資産縮小措置を打ち出していき事が出来ないとの見方が支配的だ。一昨年末に翌年の利上げの回数は4回との見通しを示しておきながら、実際には1回(12月)しか実現しなかった前例があるからだ。労働市場がほぼ完全雇用状態に達したと見られるにもかかわらず、賃金がなかなか上昇してこない中で、今回のFOMCでインフレ見通しが引き下げられた事がそれに拍車をかけたようだ。

これまで、中間派からタカ派寄りの地区連銀総裁はじめFOMC委員がしきりに「年内に3回利上げするとの見方は妥当」「資産縮小措置は年内に開始すべき」と頻りに発言してきたにもかかわらず、市場はなかなかそれに反応しなかった。

むしろ今回の政策決定を受け、元よりFRBと市場との間には大きな認識ギャップがあったが、それがさらに拡大してしまったようだ。FRB関係者と頻りに接触しているプライマリーディーラーの間では、6、9月に利上げが、12月に資産縮小の開始が決まる事が当然視されていたのとは対照的である。

FRB執行部が利上げや資産縮小措置を急ぐ理由としては、経済環境面では景気が悪化した際の利下げ余地を確保する事や、FF金利が物価水準を下回っており実質金利がマイナス状態にある中で、住宅価格の高騰やローン残高の積み上がりを防ぐ事がいわれている。またイエレン議長が来年2月に、執行部で実際に主導権を握っているフィッシャー副議長も7月に任期満了を迎える中で、後任にハト派が指名されるのを見越して、今のうちに金融政策の方向性の道筋をつけておく意図がある事も指摘されている。

【今回の政策決定の本当の目的とは?】

ただ最近の政治情勢との関係から注目されるのが、かねてからFRBの金融政策を批判してきたトランプ政権がロシアゲート問題もあって動揺している事だ。フランスでは親EU的なマクロン候補が勝利して議会選挙でも新大統領を支える新党が圧勝し、英国でもEUからの強硬離脱路線を推進しているメイ首相率いる与党・保守党が過半数割れとなった。日本でも加計学園の問題もあって、さしもの安倍政権に陰りが見られるようになっている。

重要な事は、それにより親ロシア的でグローバル志向から距離を置く親イスラエル右派が後退する一方、反ロシア的でグローバル志向が強い親イスラエル左派の勢力が巻き返している事だ。

それでも、最近でも軍需産業系の後押しを受け中東ではサウジとイランとの関係が悪化するなど前者の勢力も依然健在ではあるが、相対的に後者の勢力が挽回している事で金融資本(ウォール街)が影響力を回復させ、FRBの自由度が高まっている。

今回の資産縮小措置は、そのFRBの大株主に大手金融資本が名前を連ねているだけに、まさに大銀行の利害に沿ったものだ。

今、FRBは利上げを決めてFF金利を高め誘導するにあたり、銀行がFRBに預けている当座預金の付利金利を引き上げる事で対処しているが、これは国民の税金負担で銀行に「ただ働き」で儲けさせているとして、特に議会共和党の間ではすこぶる評判が悪い。そこでFRBの資産を圧縮して超過準備を減らす事でそうした批判をかわす一方で、長期金利を押し上げてイールドカーブをスティープ化させ、銀行が収益を上げられやすい環境にしようというものだ。

さらにいえば、裏側で財務省やFRBと連携して国際金融市場で展開の主導権を握り、実質的に動かしている米国の大手金融資本の勢力にとって最も望ましいのは、当面はFRBが「緩やかに」利上げを推進して資金を米国に還流させる一方、日銀には超強力な量的緩和策を継続させる事で自国の株高傾向をもたらす事だ。

FRBが緩和的な政策を続けると米国でもバブルが膨らんでしまい、それが崩壊すると米国の銀行の資産も傷んでしまう。それよりは、FRBだけが金融政策の正常化に向かった方がそうした弊害を回避できるだけでなく、中国を筆頭に新興国から資金流出を加速させて危機的な状況に追い込む事で、「米国独り勝ち」状態を現出する事ができるからだ。

これはまさに、ドル高とともに米株価が高騰した90年代後半に似た状況といえなくもない。しばらくはFRBが「粛々と」金融政策を正常化させるとともに株高傾向が続いても、いずれかの時点で新興国危機が再発しておかしくない。

それが米金融市場にも波及する段階になれば、米大手金融資本は株式を売り崩せば良いのである。

それにより米国経済がリセッションに陥れば、いよいよイランへの軍事攻撃が現実味を帯びるだろう。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ザ・テクニカル

月足では
ロケットスタート

日経平均株価は6月20日にギャップアップして年初来高値を更新、20,318を付けた。ただその後はこのギャップを埋める如く、週末には20,089まで緩やかな調整を演じた。

先週のタイトル、「下げは緩やか、上げは急」で述べた局面が続いているが、最終的なコメントは次の通り「現段階では6月1～2日の上昇幅を完全に打ち消さない限り、同じような急上昇局面がまもなく到来すると見る。その上昇で高値が更新されれば、次は安定上昇トレンドに入る事を示唆するだろう。つまり1ヶ月以上の上昇トレンドの到来である。逆にその上昇波が到来しなければ1～3月のような高値更新後に売られるパターンが懸念されるところとなろう」。

相場は週明け月～火曜日に上伸したが、まだ安定上昇軌道には入っていない。ここでやや懸念されるフォーメーションが出現した。5月以降三度の高値更新はその後直ちに調整に入り、トレンドが発生しているとはいえない。下手をすれば、昨年7～9月のような場面に出くわす恐れもある。とはいえこの波動自体は上昇チャネルライン内の推移で強気であるが、押しが深

今週の押し 恐らくは三尊天井

先週、ユーロドル相場に関しては以下の通りコメントした“14日高値が目先の天井であったと考える。従って目先は売りの姿勢を推奨する。その際、14日高値以上の引け値にはストップロスを入れておく。…この相場は1月以降上昇チャネルラインを形成しており、その下限は目下4月20～24日に生じた1.0777～1.0820のGAPともシンクロしている。従ってここまで下落する可能性はあれど割り込まないと予測する。現実的な下値目標値は、仮に大きく下げても1.0846±0.0053までと考える。これは4月10日安値から先週の高値までの上げ幅の62%訂正水準に相当する。またこの水準は1月3日からの上げ幅の半値押し水準(1.0818±0.0056)ともシンクロする。これ以外にも、前者の半値押し水準(1.0932±0.0043)と後者の38%訂正水準(1.0931±0.0043)がシンクロ。ここは69日移動平均とも重なり、目先の最有力下値目標値といえよう”。

今週も、この見方に変更はない。基本は戻り売り方針である。

い。今回の押しも2万を下回り、6月15日の安値に接近するようであれば、安定上昇トレンド入りを宣言するには早いかもしれない。

特に今回の如く三度目の高値更新直後の下げではしばしば前の押し目に接近、さらには5月18日の安値をもテストする可能性が出てくる。しかしその安値が維持されていれば、近々昨年10月のような上昇波動が到来するだろう。

一方で、今週高値更新に成功すれば既に昨年10月のような上昇局面に入っていると考えられる。

どちらも強気には変わらない。4月17日に1年サイクルが底打ちしている限り、最低でも10月までのトレンドは上昇であり、現在のジグザグな局面は4月から始まった上昇トレンドの中段の踊り場的な位置づけ。2015年6～8月の15年ぶりの高値に対する抵抗は警戒が必要だが、8月中までに突破できれば、以前から述べている1年サイクルの天井目標値は達成可能だ。すなわち「等比級数的に伸ばせば三段上げでは22,890となる」。

日足線ではもたついているように見えるが、月足では昨年12月高値以降からの調整は4月に終了し、5～6月の月足線は既にロケットスタートに入っている。弱気シグナルは点灯しておらず、まだまだ買える相場とみる。

ただ、罫線的に気持ち悪いのは、先週の相場が以前から指摘している上昇チャネルライン上限の2つの帯内で推移し、日足では先週末の段階でこのラインと23日移動平均を上回る寸前に来ているという点である。これが先週14日高値からの下げに対するプルバックであれば、今週の相場ではこの上限ラインを突破して14日高値を突破する可能性は否定できない。

しかし、今週は1月3日の安値から25週目に入り、日柄的に上げの余地は残されていない。今週仮に上値を模索したとしても1.4付近の上値抵抗を突破する力はないと考える。

まだ、明確なシグナルは出ていないが、筆者は目下この相場が日足レベルで14日高値を頭とした三尊天井(ヘッド・アンド・ショルダー)を形成しようとしているのではないかと見ている。もしそうであれば、相場は今週この三尊の左肩と目される5月23日の高値1.1266付近まで戻した後に反落。チャネルライン上限を割り込み、1.1120付近にあるネックラインをも割り込んで1.1000を目指すのではないかと予測する。恐らくそうなった時、15日スローストキャスティクスと相場は強気オシレーターダイバージェンスの関係になるのではないかと。



今週の相場風林語録

相場聞くより運勢見よ

だれ彼に相場の強弱を聞きたがる人がいる。この場合、その人がツイているか、曲がっているかを確かめるべきだ。あるいは、自分の運勢が有卦の周期か、無卦の周期かを知るべきである。

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

◎マイナス金利時代に株を持ち続
けて成功する秘訣を解き明かす

◎10倍になる株など豊富な実例
で銘柄発掘の心得を公開！

◎株式投資の実践編として〈有望
銘柄掲載〉！

株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー

代表取締役社長

足立 眞一 著

発行：開拓社 定価：1,296円（税込み）



今週の九星★波動

南雲 紫蘭

率直に見てみる

久方ぶりにF R Bによる利上げが実施されました。更に資産縮小も発表されたので、本来ならF R Bへの疑心暗鬼でドル高に一気に振れてもよさそうなものであったのですが、実際はギリ高程度で推移しています。

やはり、F R Bによる資産縮小の規模がどうやら市場に衝撃を与えそうもない事が安心材料となり、今一つドルが迫力ある上昇をしない要因となっているようです。

一方、株式市場にとってこの微温的なマーケットフレンドリーな利上げは「最高」であったに違いありません。F O M C後の不鮮明な為替相場に比べ、世界の株式市場はとりあえず大きなリスクを乗り越えたとみなされ上昇しています。冷静に考えて、金利が上昇しつつ景気が拡大するというのは、間違いなく景気や株価上昇が共に最終局面入りしているのだと感じます。しかし、それでもしばらくは宴が続くのでしょうか。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (400)

中原 駿

しかし、同じ種銭でもいいところ — 結果論ではあるが — で仕掛けられるか、それとも短期的でもオーバーシュートでやってしまうかはその後の精神的な位置づけがまるで変わってくる。

しかも、上野は巨大な含み損を部下のために抱えていた。それが解消されるようなポジションにならなくてはならないし、同時に毎月の評価損益を改善させるものでなくてはならない。

そうした条件が上野から自由度を大きく奪っていた。上野にとって、部下の作ってしまった含み損の解消は必須だった。だが、わずかなりとも救いだったのは、クロスヘッジという方法でリスクの拡大はなくなっていることであつた。



第六感の 軌道に乗るサブサイクル上昇期

テクニカルアナリスト 葛城 北斗

短期の節目は多々あるが基本はドル買い

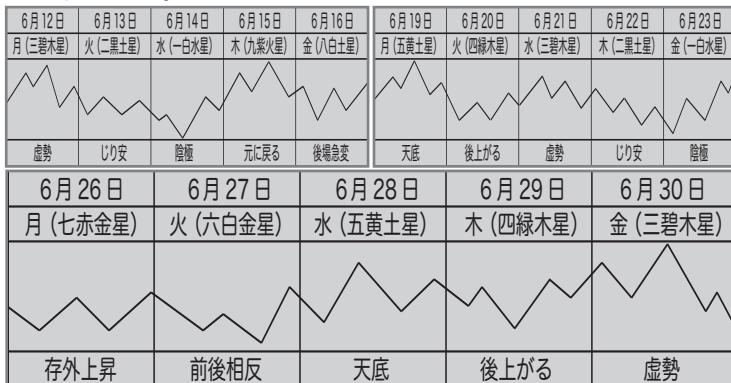
ここまではドル円相場のサブサイクルは予定通り機能しているといえる。先週は20日に111.80まで上昇した後、調整に入ったが、最低限110円台が維持できれば、依然として強気型サイクルの上昇期は継続されていると考える。

先週のコメント「今週はサブサイクルの1週目。まだボトムを十分に確認したとはいえないが、この上昇期は少なくとも3～5週はあるとみる。完全強気型なら想定外の高値が出現する可能性がある。その場合は115円台も可能だ。実に安値から7円幅。目先の上値抵抗は113円前後。その前に111.80に弱い抵抗がある。いずれの抵抗ゾーンも機能して相場が跳ね返された場合、その下げは軽い押し目になるとみる。現段階では110円以下に下落して引けない限りは、サブサイクルは先週ボトムをつけたと考え、数週間でボトムから3～5円幅、最大で7円幅の上昇を見込む」。

まずはF O M C直後の安値から3円幅上昇し111.80をテストした。先週はここで跳ね返され、軽い調整を演じている。現段階ではこのシナリオに対して変更はない。引け値で110.50が更新されれば、瞬間110円割れの懸念は残るが、それでもF O M C直後の安値を下回らない限り、現行サブサイクルは今週まだ2週目という位置づけは変わらない。7月中に5月高値114.36更新を目論む。その前の押し目は全て買いで対処。現段階では110円台に瞬間入るも引け値で111円を回復す

さて、九星高下伝は月盤《四緑木星》も終盤。円高となってもおかしくはなかったのですが、年中盤の反転が効いているのかも知れません。つまり対円、対ユーロでドルの反転とみなすのが正しいのでしょうか。

あるいは、単純な株高、というのがストレートな見方なのかもしれません。



いや、正確には完全なヘッジではないが、代替通貨でヘッジしているのだからまだいいのであった。

いや、良いはずであった。

とりあえず蓋をしている部下の含み損失を減らすための利益、それも短い間に大きく儲かるポジションが必要であった。

そのためには、債券としては最も値動きの大きい30年債を狙うしかない。

30年債はわずかなイールドカーブの変化に対しても大きく値段が変わる。

単純に考えてみよう。1年債であれば、1%のイールドカーブの変化はほぼ1%の価格変化をもたらす。2年、5年となるにつれて利率の変化は価格に大きく反映していく。

一方、6か月ならば半分程度に3か月ならばさらに小さくなっていく。そうした大きな価格変化こそが狙いであった。

「買うならば、30年債しかない」。

何度も上野はうなづいた。

る動きは浅い押し目といえる。一方で深押しが入るとすれば、110.50を瞬間下抜け、引け値で回復する動きになるだろうか。先週の高値を更新して引けてくれば、調整終了のトリガーになるう。うまく上昇軌道に乗れば、途中、113円前後、115円前後、それぞれ一部利食い。その後の押し目をまた買い直すのも良い。

日足チャートのトライアングルの上限は今週113.50～30近辺に降りてくる。阻まれると1～1.5円幅の調整が入ろう。

一方で112.20を超えるような動きが出れば1円以上の大陽線になる可能性がある。

112.20前後で阻まれると逆三尊のネックラインになる恐れがあり、逆に1円以上の押しが入るだろう。短期売買ではそれぞれの節目で利食いや途転の仕掛けをするのも良いが、数週間の基本的なトレードは買いに徹したい。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第44回】NYダウのサイクルについて(8)

2週続けてNYダウの50週サイクルについて解説しましたが、メリマン氏の週足サイクル分析の基本(プライマリー)は、プライマリーサイクル(PC)です。通常、50週サイクルの中にPCは2〜3個入るのですが、ここ最近では2個入るのが通例となっていました。現行50週サイクルの起点は2016年6月27日の17,063ドルなので、ここから42週目、2個目のPCがボトムをつけた4月19日の20,379ドルをもって50週サイクルがボトムをつけたと見る事も出来るのですが、筆者は懐疑的です。

相場サイクルがボトムを形成時に、移動平均線は非常に便利なツールです。ここを上下に振れると往々にして相場の天底が判明することが少なくありません。直近の好例が2016年11月安値形成場面でしょう。相場はここでPCボトムをつけました。しかし今回、4月安値で移動平均線を割り込んでいないのです。前の50週サイクルでも、もう一つ前の50週サイクルでも、内包するPCボトム形成場面で、相場は移動平均線を割り込んでいました。まだ50週サイクルがボトムをつける日柄が残っているので、現行PCボトムが現行50週サイクルのゴールと見ます。

ここまでの見立てが正しければ、今週は4月19日の安値から起算したPCの10週目です。通常、この相場のPCは、サブサイクルとして3つのMC(5〜7週)か、2つのハーフPC(8〜11週)で構成されます。ここまで押しらしい押しが出現していないので、現在はハーフPCの10週目に入っていると見ます。従って、現在のNYダウはサブサイクルの上げの日柄も満ちはじめていると言い換える事が出来ます。

恐らく相場は20,500ドル付近にある25週移動平均を試すような下げに見舞われるのではないのでしょうか。しかし、ここを割り込むと20,000ドル、ないしそれを割り込む可能性があります。そこで現行50週サイクルがボトムつけるかも知れません。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

クラスターの中心は7月1日ゆえ

先週の当欄では次の通り述べた“…注目ポイントは21日の太陽の蟹座へのサインチェンジと24日の新月。ここ最近の主要天体位相と比較すると小粒感否めませんが、かといって、大きな相場の節目にならないと言い切る事は出来ない。特に21日のサインチェンジするサインはカーディナルサイン(牡羊座、蟹座、天秤座、山羊座)である。太陽がこのサインに入る場面はアストロロジー上の季節の変わり目。昨年発売された『フォーキャスト2017』や、今週末発売されるメリマン・スペシャルCDの中でも採り上げられているが、今年はこのアストロロジー上の季節の変わり目が相場だけでなく、米国やひいては世界の政治や社会に影響を与える可能性がある。従って夏至の相場には注意しておきたい。ちなみに、相場に重要な影響を与えそうな直近の星回りは、来月27日の太陽・火星コンジャンクション(0度)である”。ここで指摘した通り、先週の相場は夏至付近で節目をつけていたと言える。

先ずS & P 500が先週の高値をつけたのは19日。その翌日にNYダウが高値を更新している(ダイバージェンス?)。この日はドル指数も週の高値を更新。日経平均株価も年初来高値を更新した。一方、NYの金と原油はまさに夏至の当日に週の安値をつけ、そこから反発している。原油は前週末の海王星逆行の影響からの反発を当欄で予測したが、逆光開始日から3営業日目に安値が出現したので金融アストロロジー的には逆行の影響もあったと言えるだろう。

これらの動きが短命に終わるか否かは現段階では分からない。ただ26日の火星・海王星ライン(120度)、27日の水星・木星スクエア(90度)、28日の水星・海王星ライン、29日(日本時間)の水星・火星コンジャンクション(0度)、30日の水星・冥王星オポジション(180度)等々、小粒だが反転ポイントになりそうな天体位相が断続的に続く。最新の『MMA日経週報』によると、このような状態は6月24日の金星・冥王星ラインから7月10日の太陽・土星オポジションまで続き、その中心点は7月1日であるとの事。ただこの日は土曜なので、今週末と来週頭の相場変転には注意しておきたい。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み!!

今週のアストロロジー info

- 6月26日(月) 株式の変動が激しくなる週
- 6月27日(火) 上がると思えば下がり、下がると思えば上がる
- 6月28日(水) 曲がり屋に向かえ
- 6月29日(木) 相場に張り付けば翻弄される
- 6月30日(金) 重要変化日前後営業日注意
- 7月1日(土) 何をやっても、何を考えても、
逆、逆に行く日もある
- 7月2日(日) 底天井一割動いて確認、二割動いて手仕舞い

ラジオNIKKEI メリマン氏最新インタビューCD

年後半の注目点となるか? 8月の皆既日食

メリマン・スペシャルCD

メリマン2017後半大予測!

出演:レイモンド・メリマン 解説:林知久(投資日報社)

緊急
発売

サイクル、テクニカル、そしてアストロロジーで種々の相場を分析予測し、その中率の高さから世界中にフォロワーを持つMMA(メリマン・マーケット・アナリスト)主宰、レイモンド・メリマン氏。そのメリマン氏、ラジオNIKKEI社は毎年2回、彼が年末に上梓する年間予測本『フォーキャスト』執筆直後の12月と、発行後半年経過した6月に電話取材を敢行し、それをもとにした音声コンテンツを製作されています。相場以外の話題といえば、やはりトランプ大統領の今後の動向になるのではないのでしょうか。彼は1946年6月14日、月食(太陽と月を結ぶ直線上に地球が入り込む時間)の時に生まれています。これに加え、彼の出生図からは独創的で、カリスマ性のある、名声も悪名もどちらも獲得出来るキャラクターである、とメリマン氏は分析しました。氏は、混迷の大統領選でトランプ氏が勝利する可能性があるとい前から指摘していた数少ない一人でした。

今年8月21日、全米で皆既日食が起こります。これは全米に、大統領に、そして相場にどんな影響を与えるのでしょうか。恐らくこの前後の時間帯は直近の注目ポイントになるのではないかと考えます。もちろん、このようなアストロロジーの話だけでなく、サイクル、テクニカルの観点も加えた日米株式、通貨(ドル、ユーロドル)、金、原油、穀物の見通しについてもお聞きします。アストロロジーに興味の無い方も『フォーキャスト』のサブテキストとして、メリマン理論入門篇としてお聞きください。

製作:ラジオNIKKEI 価格:6,480円(税・送料込)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ:投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは:東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE人形町6F 電話:03-3669-0278 FAX:03-3668-4444

FORECASTS 2017

ザ・グレートリセットとは? 改めて読んで納得!!

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日播香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ:投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
お申込みは: